

Summary, 16 September, 2020

日時：2020年9月16日 17:00～18:00

場所：Zoomによるオンライン開催

「モンゴル語族の動詞屈折の諸問題」

発表者：山田洋平（東京外国語大学世界言語社会教育センター講師 / モンゴル語、言語学）

本発表ではモンゴル語学における動詞屈折の問題点をまとめ、とくに分詞形（従来は形動詞形と呼ばれる）形式と定動詞形がモンゴル語族の諸言語の中でどのようにふるまうかという点を整理した。その上で動詞屈折の観点からモンゴル語族の諸言語を北方のグループと南方のグループに分けて、言語史についての簡略な考察を述べた。動詞の分詞形の用法の史的变化は一律に起こったものではなく、主節における時制を表す用法の違いによりそれぞれ逆の変化を経てきている。

モンゴル語族の諸言語において定動詞叙述形のうち過去時制を担うとされる形式には1~3種類あり、中世モンゴル語における -IAGA に対応する（同源と思われる）形式を有するのは北方の諸言語のみである。他方、完了分詞形が主節の述語として過去時制を担うことができる言語も同じく北方の諸言語に多い。これは過去時制を担う形式が複数ある言語においては、それぞれの形式が証拠性などのモダリティ的な意味を担う比重が増えたために、モダリティ的に中立的な過去時制を表す形式として完了分詞形が主節での述語用法を発達させた結果ではないだろうか。

非過去時制を表す形式はモンゴル語族の諸言語においておおむね同じ定動詞叙述形の要素が用いられる。そこでは分詞形が主節で用いられる余地がなく、もともとは主節でもある条件下で用いられていた未来分詞形が、単独では主節で用いられにくくなるという変化を経た。これは、過去時制において分詞形が主節用法を獲得したのと逆の変化の過程であると言える。